源流の四季

第43号（2011年10月）秋

Autumn

発　行　所／多摩川源流研究所　〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村1911
TEL 0428(87)7055　FAX 0428(87)7057
http://www.tamagawagenryu.net
E-mail:b-nakamura@npokosuge.jp
発行責任者／中村文明
協　　力／多摩川源流協議会（甲州市・奥多摩町・丹波山村・小菅村）
多摩川源流観察会　NPO法人多摩源流こすげ
印　　刷／（株）ケイ・トゥー・ワン

泉水谷紅葉

Contents 目次

多摩川源流トレイルラン大会に650名参加!! …… 2
こすげお散歩　ゆ～の路 …… 2
第3回全国森林作業道研究会を開催 …… 3
源流体験特集…… 4～5
食農体験実習…… 6
「ミューゼス研究会の活動紹介」報告…… 6
狛江市緑の実態調査進展…… 7
特産品・マコモタケの販売普及へなど …… 7～8

多摩川源流トレイルラン大会に650名参加!!

青空のもと9月18日に開かれた第3回多摩川源流トレイルラン大会に、全国各地から650名が参加し、終日小菅の湯周辺は活気に包まれた。大会は、小菅村観光協会、小菅村、NPO法人多摩源流こすげ、多摩源流小菅の湯、ほうれん坊などで構成する第3回多摩川源流トレイルラン大会実行委員会（広瀬和章実行委員長）が主催した。

春の源流まつりに並ぶ秋の一大イベントへ

この大会は、小菅村の自然環境の素晴らしさを、トレイルランを通して多くの方に知ってもらい、春の源流まつりと並ぶ大きなイベントとして育て村の活性化に貢献する目的で開催されたもの。過去2回はKFCクラブとほうれん坊の小島力さん達が中心となって行っていたが、今回はKFCクラブの協力のもと観光協会や小菅村など実行委員会が中心となり多くの村民が参加する村ぐるみの大会に成長した。

第3回多摩川源流トレイルラン大会

降矢村長が参加者と東京マラソンに感謝

開会式で、広瀬会長が「皆さん、ご苦労様。このように大勢の参加に感謝したい。小菅村のトレイルランを楽しんでほしい」と挨拶。続いて降矢英昭村長は「遠くは愛媛や兵庫をはじめ全国各地から650名のランナーが集い大会が開かれることを村民一同大変喜んでいる。今回は村内外から130名の皆さんにボランティアとして協力して頂いている。この大会に、東京マラソンより未来につなぐチャリティとして多大な支援を頂いた。今日は、秋の青空の下、多摩川の源流の森林を思いっきり駆け抜け、巨樹・巨木の森の爽やかな風と空気を思う存分楽しんでほしい」と激励した。

「自然の豊さに感動 来年も参加したい」

参加者は、午前10時に小菅の湯をスタート、山沢入りから、鶴寝山、松姫峠、奈良倉山、鶴峠、オマキ平、原始村、小菅村遊歩道から小菅の湯にもどる源流トレイルランコースを駆け抜けた。距離は30キロ、所要時間は4時間30分。松姫峠に第一関門、鶴峠から森林作業道を100メートルあがった広場に第二関門をもうけ、参加者のチェックと給水を行った。優勝者はタイム2時間2分だった。参加者は、口々に「完走できてよかった」「自然の豊かさに感動した。来年も参加したい」「素晴らしいコースだ。もっともっと参加者は広がると思う」と感想を語っていた。

一斉にスタート

KFCクラブ代表の大西さんは、「昨年よりコースが整備されよくなった。小菅村の貴重な自然環境を多くの方に紹介できてよかった。このトレイルランイベントが、地域おこしに結びついて成長してほしい。何よりも小菅村のことを多くの方に知ってほしいし、手応えを感じているのでこれからも続けたい」と今後の決意を語っていた。

広瀬会長から表彰を受けるランナー

こすげお散歩 ゆ～の路（みち）

第3回多摩川源流トレイルランと歩調を合わせて9月18日に、小菅で活動する東京農業大学や法政大学の学生達が、「こすげお散歩 ゆ～の路」を開いた。23カ所を巡るスタンプラリー、夏の最後の思い出コース、おいしいお食事処などが、小菅村中組地区を中心とした小菅の湯周辺で繰り広げられ、多くの人で賑わった。

特に人気を集めたのは、スタンプラリー。小菅の湯、物産館、明星大学、古民家、法政東屋、炭焼き小屋、水神様、富士信仰、ココペリなどを順に巡り、スタンプを押しながら現地を見学し、今年から始まったガイドウォークを楽しんだ。温泉周辺には、クラフト工房や積み木遊びコーナーもあり、多くの家族連れが訪れ、親子で楽しんでいた。東京農業大学の草川梢さんは「みんなで楽しく取り組めた。ガイドウォークやスタンプラリーの新しいポイントも加わった。縄文土器やマコモ、門構えなど小菅の新しい魅力に触れられて嬉しかった」と感想を述べていた。

にぎわいを見せたゆ～の路

第3回全国森林作業道研究会を開催

全国源流の郷協議会は、9月12日から13日の2日間、長野県根羽村の老人福祉センター「しゃくなげ」で、第3回全国森林作業道研究会を開催、長野県を中心に林業や森林関係者60名が参加した。森林作業道研究会は、根羽村のトータル林業に学びながら森林管理の基盤である林道や森林作業道を全国各地に開設・普及することがねらい。

森林資源を活用し林業の振興と発展を

挨拶する降矢英昭会長

開会の挨拶にたった降矢英昭会長は「台風12号で全国源流の郷の会員である奈良県の天川村、川上村、上北山村、下北山村において大きな被害が出た事に対して心からお見舞い申し上げる。根羽村においては、森林資源に付加価値をつけて流域で活用する先進的な活動が展開されている。今日の研究会では、根羽村の森づくり地域づくりに学びながら、森林資源の活用を図り、林業の振興と発展をともに探求したい」と参加者に訴えた。続いて、地元を代表して大久保憲一村長が歓迎の挨拶を、来賓として全国森林作業道研究会の酒井秀夫会長、林野庁森林整備部の三重野信課長補佐、根羽村森林組合の小木曽亮弐組合長がそれぞれ挨拶した。

森林作業道は林業を変える

研究会では、「道づくりと林業の振興」と題して酒井秀夫東大教授が講演した。酒井先生は「道は林業を変える。集約化・団地化し道を入れれば間伐が進み山の価値が変わる。今、道づくりのための道づくりから、森づくりのための道づくりへ大きく変わろうとしている。一昨年の政府の森林・林業再生プランをうけて、路網・作業システム検討委員会が設置され、路網を構成する道が林道、林業専用道、森林作業道と整理された。

今回の台風による災害でも表層崩壊から深層崩壊へと大きく変化している。日本列島の地形、地質は複雑であり、日本列島の成り立ちをよく研究し理解を深めることが大切である。作業道ができることで林業が変わり、確実に山が改善されていく。丈夫でこわれない作業道を作るために、地域ごとの地形や地質を研究し技術を高めていこう」と強調した。

講演する酒井東大教授（9月12日）

『親が植え、子が育て、孫が伐る』

「根羽村のトータル林業について」と題して講演した大久保村長は「根羽村の森林面積は村全体の92％（8257ヘクタール）で、そのうち村有林が49％（4057ヘクタール）占めているのが大きな特徴である。根羽村林業発展のキーポイントは、第一に明治40年、村有林を一戸当たり2.5ヘクタール貸付、さらに分収林3ヘクタール、合計5.5ヘクタール全村民へ貸与したこと、全ての村民が森林所有者となり『親が植え、子が育て、孫が伐る』親子三代の山づくりが開始され山づくりへの熱意が育ったこと、第二に、大正3年に矢作川流域の明治用水土地改良区が『水を使うものは自ら水を作れ』の理念の下で水源かん養林427ヘクタールを購入し、百年に及ぶ上下流交流の礎を築いたこと、第三に大正11年、村有林1297ヘクタールを国と官行造林契約を結び、大規模な植林活動をやり遂げ、戦後復興期に成長した木材が村の財政を潤したこと、第四に、平成7年に村内最後の製材工場を村が購入し、林業を再度『業（なりわい）』として再興する基盤を確立し、森林資源に付加価値つけて販売するシステムづくりを構築し根羽村林業の再興期を築いたことである」と根羽村林業の歴史を明らかにした。

森林組合に情報が一元化される仕組み完成

平成6年のネバーランド建設計画を契機に地域材の活用を探る活動が動きだし、平成7年には村づくり支援機構メンバーと設計士が先進地視察を行って、地域づくりの機運が育ちはじめた。平成7年、村は村内最後の製材所を議会の反対を押して購入、平成8年に役場・森林組合・若手設計士・工務店が連携して『根羽スギを考える会』が発足し、『根羽スギ』のブランド化への取り組みが開始された。板材主体の利用から構造材（梁・桁）への利用拡大と木材加工施設の整備が進められ、ついに平成9年、『根羽スギ』を構造材として現しにした住宅完成へと発展した。こうして山元から住宅を建築するエンドユーザーまでの情報が、森林組合に一元化される仕組みが完成し、木材生産（1次産業）、木材加工（2次産業）、販売・利用（3次産業）の全体を束ねた根羽村のトータル林業を可能にした」と締めくくると大きな拍手に包まれた。

さらに研究会では、「水を使うものは自ら水を作れ」と題して明治用水土地改良区の竹内清晴事務局長が、「道づくりと森林整備」と題して京都大学名誉教授の竹内典之先生がそれぞれ講演、二日目は作業道作設現場と根羽スギモデル住宅「杉風の家」、根羽村森林組合木材加工施設を視察、午後は根羽村森林組合の先進事例発表の後閉会した。

根羽村の木材加工施設を視察する参加者（9月13日）

緑と水の森林ファンド助成事業

源流体験特集

子ども達のキラキラした瞳に感動

小菅村・多摩川源流研究所・NPO法人多摩源流こすげは、都会で生まれ育った子ども達が本物の自然を体験し、自然の素晴らしさと偉大さを五感で味わい川や森への理解を深めることを目的に源流体験教室（河川整備基金助成事業）を実施した。流域から26団体が参加、源流体験の輪が大きく広がった。今年は、地域おこし協力隊が源流体験事業を担い、若い力と新鮮な指導を吹き込み源流体験教室に新しい魅力を広げたのが大きな特徴だった。

源流体験滝修行の様子

新しいコースの新しい魅力を探り合う

3・11東日本大震災は、源流体験事業にも大きな影響を与えた。この9年間実施していた源流体験教室の場所が、地震の影響により林道が通行不能になり利用することができなくなった。私たちは、水辺の楽校をはじめ多くの流域の自治体や団体から協力を得ているこの事業を是非継続させようと、小菅川源流を何度も調査した。その結果、これまでと違う場所で源流体験を実施できる場所を見いだし、体験コースを整備した。実施に当たって、小菅村地域おこし協力隊を中心に事前学習を行い、どこを渡るか、どんな資源があるか、渓谷の特徴や説明のポイントなど新しいコースの魅力を探り合った。

新しいコースを源流体験

小菅小の子ども達のキラキラ輝いた顔

7月16日、いよいよ地元小菅小学校3年4年による源流体験が始まった。小学校からは4年担任の奥秋香先生と3年担当の山口先生が同行、子ども達は新しいコースを歩き始めた途端、「水が冷たい」「涼しい」「ここが教室だったらいい」という反応がびんびん返ってきた。

川の蛇行を歩き通し、強い流れを横切るところでは、流れに逆らいながら真剣な顔で渡っていた。スタッフが「川は流れが主人公。流れに従って右側が右岸。左側が左岸。これは世界共通だ」「右岸の削られた痕は、一段目が平成19年の台風。二段目が昭和57年の台風。二段目は、57災害といって、小菅村のワサビ田もめちゃめちゃに壊されすごい災害だった。その時上流では601ミリの大雨だった」と語りかけるとくいるように聞き入った。

上流の岩石に規則正しい割れ目が見える箇所（板状節理）に、ミツバツツジとヒノキ、ミソサザイの巣を発見。そこで小菅村の花がミツバツツシ、小菅村の木がヒノキ、小菅村の鳥がミソサザイと解説。大きなサワグルミが倒れ、谷をまたいでいるところではこの木が獣たちの道になっていて夜に動物たちが渡ると語りかけると興味津々だった。

そしていよいよ最後のクライマックスである滝の修行場に到着する。「すごい」「いたい」「虹が見えた」「もっとやりたい」と歓声をあげ、子ども達の表情がキラキラと輝いていたのが印象に残った。また、帰りの橋の上からの飛び込みも子ども達のお気に入りの場所になっていた。地元の子ども達の生き生きとした反応と表情に触れて、新しいコースも、流域の子どもや親たちに必ず受け入れられると確信した。

成長でき充実した夏だった

源流体験に指導者として活動した地域おこし協力隊は、今年の源流体験の最大の功労者であった。源流体験のヘルメットやライフジャケットの準備、体験のガイド、ガイドの資料づくり、子ども達の安全確保、アンケートの回収と源流体験全体を仕切ってくれた。隊員も今年の夏は多くのことを学んだようだ。

青柳博樹さんは、「私は源流部と久々の対面だったが、あいかわらず気持ちのいい場所だった。他の隊員もきっと自らが受けた感動と共にこの地の魅力を伝えられたと思う。自然の持つ美しさや厳しさをそのままに伝えられる源流体験で、隊員もまた小菅への想いが大きくなったと思う」と語った。

井上善史さんは「こども達が見つめる世界の素敵さに、案内しているスタッフ側が新たな視点を得ることができ、源流体験を通して成長することができた」と笑顔で語った。

菅井香波さんは「はじめは、不安で台本通りにしかできなかった。魚やカエルの見られる場所もわからなかった。それでも、子どもたちの笑顔はとても救いになった。『わかることをわかりやすく』伝える努力をした。自分なりに工夫できるようになると、いくらか肩の力が抜けてきた。一番小菅の夏らしい仕事をさせてもらえて、自分で話をしているうちに知識も身に付き、とても充実した夏だった」と感想を語った。

河川整備基金助成事業

本物を味わい自然の偉大さや有り難さを実感

源流体験は、かつてない反響を広げた。「多摩川の源流の素晴らしさを体験することができた。スタッフの子どもを見る目線や気配りに頭が下がった」「カツラの木の香り、サワグルミの背の高さ。もっと気楽な沢登りと思っていたが本格的で驚いた」「印象に残ったのは、川の水温が冷たくて手がしびれるほどだったこと。川を渡るときのコツ（大きい石の上は乗らないことなど）。川の流れの早さと強さが体験できたこと。滝に打たれて気持ちがよかったこと」「本物を味わい自然の偉大さや有り難さを実感できた」など源流体験の参加者から沢山の感想をお寄せ頂いた。

源流体験参加者の感想

大人の感想

●多摩川の上流が、あんなに美しいものとは思いませんでした。観光地化されないありのままの姿を見ることができてよかったです。とても貴重な経験でした。ガイドの方が木のお話やまわりの環境のお話までして下さりながらの沢登りがとてもよかったです。

●子ども達がキャーキャー言いながら滝にうたれたり、ライフジャケットで流れたり、橋からとびこんだのが本当に楽しそうでとてもいい体験だったと思います。次回は自分もやりたいです。むささびを初めて見れたので感動しました。沢登りもナイトハイクもガイドの方の案内がとても分かりやすく親しみやすかった。多摩川の源流の素晴らしさを体験することができました。スタッフの方々の子どもを見る目線や気配りに頭が下がりました。また地元の方々（寺子屋の方やガイドの方）に本当によくして頂きありがたかったです。

●本物の滝に打たれる経験はまずないのでとても印象に残りました。大自然の中で沢歩きをしてとても気持ちがよかったです。ふと立ち止まって見渡す景色がすばらしく感動しました。川の流れの話や鳥の巣について等、楽しい話が聞けてよかったです。

●川の水温が冷たくて手がしびれるほどだったこと。川を渡るときのコツ（大きい石の上は乗らないことなど）。川の流れの早さと強さが体験できたこと。滝に打たれて気持ちがよかったこと。

●もっと気楽な沢登りと思っていましたが本格的で驚きました。しかし狛江では絶対に体験できないし、本やテレビでいくら見ても本物を味わうことをしないと自然の偉大さやありがたさが実感できないと感じました。

●森と川の関係。澄んだ川の水。水の冷たさ。真冬の森の様子、川の様子も見てみたい。飲料用の水、森が守られている様子がかいま見られて良かった。子どもに見せることができてよかった。

子供の感想

●色々な生き物がいて自然がゆたかだった事。水がとてもキレイですきとおっていた事。川の流れにそってウォータースライダーみたいな事をした事。滝があって、水しぶきがいっぱい飛んできた事。川の流れがとても冷たかったこと。ヒキガエルをさわったり、ザトウムシをさわったりしたことが楽しかった。もっと魚にふれあいたかった。

●たきがすごかった。石の大きいの、小さいのがあり、足のふみばがなかったこと。水のながれのはやいところを移動するのが大変でした。たきにみんなであたって、にじがみえ、すごくきれいだったし、楽しかった。たきでは、みずがあたっていたかったけど楽しかったです。

●印象にのこったことは、滝につっこんだこと。あおぶせになってうかびながら流れたこと。すごく深く、水のながれがすごくはやいところをわたったことが大変だった。最後に橋の上から飛び込みをしたのが一番おもしろかった。6回もとびこみました。

源流体験感想

岡本亮太

4月に小菅へ移った私にとって、今夏が初めての源流体験でした。

水がこれほど大きな価値を持ち、森が大きな意義を持ち、川が大きな意味を持つことを深く認識したのは、正直この歳になって初めてのことだったかもしれません。だからこそ今夏のスタッフとしての経験は私にとって、様々な発見の機会とともに大きな経験となりました。

都会から来る子供たちには、まずは小菅村の大自然を体全体で感じてほしい、そしてその自然から、強さや優しさを体感して欲しい。そこを自分の力で歩きとおす、自然に触れながら歩くことで、自分の中にも強さや優しさの芽を抱いてほしい、そう思いながら接していました。

子どもたちと一緒に滝に打たれ、飛び込むことは本当に楽しくて、彼らのキラキラ輝く瞳と笑顔を見るとこちらも心から嬉しくなるし、子供たちをそう感じさせる小菅の、源流の水や自然は本当に凄いなと再認識しました。

来年からも多くの子供たちの笑顔に出会えるように尽力します。

2011源流体験

団体数	団体名	日付	人数
1	小菅小	7/15	13
2	稲城市青少年委員	7/16	18
3	武蔵村山第2中学校	7/16	3
4	世田谷アドベンチャークラブ	7/16	17
5	サイエンス倶楽部	7/21	57
6	とどろき水辺の楽校	7/23	127
7	福生水辺の楽校	7/24	36
8	三鷹市社会教育会館	7/25	18
9	サイエンス倶楽部	7/27	57
10	バオバブ保育園	7/28	37
11	狛江水辺の楽校	7/29	33
12	稲城六小ダディーズ	7/30	22
13	昭島市環境課（大雨の為中止）	7/31	0
14	調布こどもエコクラブ	8/2	24
15	宮内中学校	8/3	40
16	多摩市水辺の楽校	8/5	31
17	稲城市青少年委員	8/7	63
18	府中水辺の楽校	8/8	48
19	立川水辺の楽校	8/11	49
20	個人参加	8/12	4
21	リトル朝日少年野球	8/13	15
22	青山地区委員会	8/14	63
23	青少年対策港南地区委員会	8/14	54
24	川崎水辺の楽校	8/20	37
25	日本児童野外活動研究所	8/21	36
26	大島さん	8/22	4
27	生田高校	8/28	27
28	武蔵村山第2中学校（台風の為中止）	9/1	0
		計	933

東京農大短期大学部「食農体験実習」報告

昨年に引き続き、東農大短期大学部の夏季集中実習の「食農体験実習」が実施されました。この実習は各学部の専門性を活かした実技実習を3泊4日のプログラムの中に組込み実施されるもので、まさに源流大学が小菅で積み上げてきたノウハウや村内のネットワークを集約・活用した形の実習となりました。

初日には村の観光施設である温泉周辺の景観整備実習として、植木の剪定やハーブ園の管理などを行いました。ここでは剪定バサミの正しい使い方やアジサイの剪定方法などを学びながら、施設の景観整備の一助となる実習を行いました。2日目には農家体験を行ない耕運機が入らない山間地農業の現場の大変さを住民とともに汗を流しながら体験し、3日目には、源流域の森林について実際に山を歩きながら目・耳・鼻・肌で感じる森林体験を行い、4日目には熟練の手仕事を習う手打ちソバ実習を行いました。

ニジマスさばき体験

景観整備実習（温泉周辺）

特にこの実習中で一番の賑わいを見せたのが「ニジマスさばき」体験でした。生きたままのニジマスを1人1匹夕食用にさばくもので、ナイフを持つ手は危なっかしく慣れない手つきでしたが、「生きてるのは無理！」という声も聞こえましたが、無事全員さばききることができました。

「ミューゼス研究会の活動紹介」報告

源流の四季春号・夏号と連続で、「植物と人々の博物館」、「ミューゼス研究会」について紹介しました。今回は具体的な取り組みについてご紹介します。

①雑穀への取り組み

今年も10月9日に「第14回大地の恵まつり」が小菅の湯で開催されます。同日に、「雑穀栽培講習会（収穫編）」を小菅の湯付近の「雑穀見本園」において日帰りで開催します（興味のある方は「植物と人々の博物館0428－87－0165」までご連絡ください）。この時期は、アカモロコシ、アワの収穫期です（キビは一ヶ月早い8月中）。アワとキビの収穫に関しては刃物は必要ありません。節をポキポキと折ることで収穫できるんです。アカモロコシは茎が硬いので、剪定ばさみや鎌を使って収穫します。収穫した雑穀は稲と同じように、干して乾燥させます。乾燥の後に脱穀→精白の作業を経て、ようやく口に入ります。脱穀では木槌、箕、唐箕などの伝統的な民具が現役で活躍します。電源を必要としない唐箕は本当にすごい民具です。

現在、小菅の湯では、村内で栽培された雑穀を買い取り、また、小菅村役場も作付奨励金制度を行い、安心して村民に生産してもらえるようにしています。

小菅村の雑穀は、小菅の湯で食事メニューになり、雑穀ビールやクッキーとして、また、ご飯に混ぜて炊けるように真空パック等の商品としても販売されています。

現在、雑穀は健康食品として注目されていますが、以前は「鳥のエサ」などといった不当な扱いを受けていました。そんな中でも小菅村では伝統的に自家用として雑穀の栽培が継続されてきました。乾燥に強い雑穀はかつて、小菅村を飢饉から救ってきた貴重な穀物であったからです。ヒエガユ、アカモロコシの大福、キビのおこわ、アワごはんなど、季節ごとに食されてきました。小菅村は伝統的な雑穀の村なのです。

5月の「雑穀栽培講習会（種まき編）」では、広瀬屋旅館の協力を経て「アカモロコシのうどん」など、新たな試みも常に行い続けています。

②植物と人々の博物館

小菅村中央公民館（YLO会館）を「植物と人々の博物館」として整備しています。小菅村の民具はもちろんですが、テーマに応じた展示も行っています。現在は、タイ王国の展示を行っています。また書庫には民族植物学を中心とした専門図書を設置しています。名称のとおり「植物と人々」に特化した博物館として整備を進めています。もちろん、建物自体は情報発信基地であり、小菅村全体が博物館であり、サテライトです。

植物と人々の博物館では「エコミュージアム日本村」という構想の下に準備を進めています。小菅村をはじめ、近辺を含む秩父多摩甲斐国立公園に来れば、日本の中にある「本当の日本、伝統的な文化の残る日本」を見ることができるということで、「エコミュージアム日本村」と名付けているのです。日本国内にスペイン村などがあるように、日本の中でも日本を感じてもらえる場所として考えています。

今年は、新潟県内の中学校の修学旅行を小菅村でも受け入れます。

秋の紅葉がはじまります。ぜひ、小菅村、植物と人々の博物館にお立ち寄りいただき、小菅の湯で雑穀メニューをご賞味ください。

狛江市緑の実態調査進展

東京農業大学は、平成23年度に狛江市の依頼をうけて「緑の実態調査プロジェクト」を実施している。狛江市における緑の現況に関する基礎調査を実施し、狛江市の緑に関する基本指針を提言するとともに、既存の一部の緑地において緑の造成、管理、利用に関する実践やワークショップなど市民参加による緑地保全のあり方を指し示すことにしている。

6月25日には、狛江市東野川3丁目の樹林地において緑地管理に関するワークショップが実施され市民16名が参加した。当日は、宮林茂幸教授が「緑のある暮らし」と題して講義を行い、そのあと麻生恵教授が「緑地管理の方向性」と題してワークショップの進め方について説明。市民は4班に分かれて樹林地を調査し現場で現状と問題点、改善方向などの意見やアイディアを出しあった。

参加者からは「ツタやツルが幹に食い込んでいる。早く外してやりたい」「樹林地の存在が知られていなかったのは残念だ」「自然に親しむためにも樹名板をつけて頂けると楽しくなると思う」「小さな遊歩道ができたらいい」「なぜ樹林地を生かすのか、残すのかもっと話し合うべきだ」「樹林地を管理する市民団体をどうするかが一番重要」などの意見や提案が出された。

また、9月9日に狛江市役所で開催された狛江市「緑の実態調査」第4回委員会は、宮林先生など13名の委員が参加、これまでの進捗状況と中間まとめが、①緑地生態部会、②緑化樹木管理部会、③緑地景観部会、④地域づくり部会、⑤情報処理部会、⑥緑地管理・実践体験部会の各部会から報告された。狛江市からは、議会でも緑の実態調査に関する質問が相次いでいる、これは市民の緑への関心の高さを示していると思うとの報告がなされた。

宮林先生は、各部会が計画書に基づく取り組みを確実に実践していること、取り組みをさらに加速化させること、緑に関する市民の意識や意向を調査し、緑の基本計画に反映させるため、小学校4年、中学校2年、一般市民1200名を対象にしたアンケート調査を実施することなどを報告した。地域づくり部会からは、アンケート調査に関して「住民の意識調査を行う。具体的には、上下流連携の検討、緑に関する意識と生活、文化に関する意識をアンケート調査および聞き取り調査にて明らかにする」との内容が提案され了承された。上下流連携に関して小菅村との交流のあり方と併せて景観のあり方に関しても調査することになった。

大田区で源流と河口の写真展を開催

多摩川の河口に位置する大田区は、流域との交流・連携を視野に入れた活動を展開しているが、今回は多摩川の源流（はじまり）と河口（おわり）を切り口とした写真展を7月19日から28日までの10日間、大田区役所1階イベントブースで開催した。

主催は、多摩川を担当している大田区役所都市基盤整備部都市基盤整備課。源流からは、源流研究所のスタッフの撮影した写真7点を出展した。開催中、市役所を訪れた多くの区民が写真展に足を止め源流と河口の写真に見入っていた。

特産品・マコモタケの販売普及へ

源流百姓の会(古菅丁会長)は、2年前から小菅村の特産物にしようとマコモタケの生産に取り組んでいる。昨年度はNPO法人多摩源流こすげや流域の市民の協力を得て大きな成果を上げることができたが、今年もいよいよ収穫の時期を迎えている。

低カロリーでヘルシーな野菜として人気

マコモタケは、イネ科の多年草。低カロリーでヘルシーな野菜として人気が出始めている。昨年度は、狛江市ではJAマインズ、野川地域センター、上和泉センター、南部センターなどの会場で、狛江市民がマコモの販売に積極的に協力した。又、川崎市の中原区民祭りでは、とどろき水辺の楽校の会員が会場を提供して共に販売に取り組んだ。

寒暖の差があることで品質や出来栄えはいい

古菅丁会長の話によると、「今年は暑い日と涼しい日が交互に訪れ、気候が変化に富んでいた。気候の変化を敏感に感じて、今年は例年より10日程度はやい。涼しくなるとどんどん成長する。寒暖の差があることで品質や出来栄えはいい」とのことである。NPO法人多摩源流こすげの望月徹男事務局長は、「流域の市民の皆さんの協力を得て、マコモタケを村の特産品販売の核になるように取り組みたい。この10月が勝負で短期決戦なので皆さんの協力をお願いしたい」と語っている。

狛江市民の協力でマコモ販売

源流・緑のボランティアを実施

源流緑のボランティア隊（9月18日）

多摩川源流に広がる民有林の多くは、木材価格の低迷により、間伐などの手入れが行き届かず森林の荒廃が進んでいる。こうした現状を打開しようと、NPO法人多摩源流こすげ・小菅村・源流研究所・源流大学の主催で、9月17日から18日の2日間、小菅村の民有地で多摩川流域の市民、東京農業大学（源流大学）の学生、スタッフなど32名が間伐に汗をかいた。

現地では、地元の山林所有者や北都留森林組合の職員が間伐作業を指導した。5班に分かれて、間伐を開始し、受け口、追い口を入れ倒し始めると、枝が隣の木にかかり悪戦苦闘、ロープを使って切り倒していた。さらに1班は作業の効率と安全の確保、今後の森林管理のために路づくりに取り組み、歩きやすい道ができあがった。参加者は「何もかも初めてで戸惑ったが、間伐が進むにつれて、林の中に光が当たった。全ての林にこもれびが入るようになるといい」と感想を語っていた。

17日、源流大学で開かれた説明会で、主催者から「間伐し搬出した木材を利用することが一番大切になっている、また、地球温暖化防止のためにも健康な森をつくりたい」と前置きし、「健全な森とは、健康な森のこと。そのためには、一本一本に光りが十分に当たること。間伐し明るい森をつくること、がんばろう。」と挨拶した。続いて東京農業大学の菅原先生が、間伐が進めば価値のある山に生まれ変わることを強調したあと間伐の方法を分かりやすく説明した。

間伐に取り組む農大生

こすげ『ものづくり工房』が始動
むらの新しい名所づくりへ

小菅村でこの6月から毎月第4週末に誰でも体験出来る『ものづくり工房』が動き出し小菅の新しい名所が生まれようとしている。この取り組みを主宰しているのは小菅村出身の地域おこし協力隊の青柳博樹さん。青柳さんは、この4月に小菅村に戻ってきたが、青柳さんの小菅への思いは強く、ものづくりの技能を活かして「小菅村に賑わいを取り戻したい」と考え、「毎月第四土日は小菅で過ごそう！」をテーマに木や竹、金属、革などを活用してものづくりに挑戦できる『ものづくり工房』を考案した。

この間、6月は「アルミと木のスプーンづくり」、7月には「森の楽器つくり」、8月は「木工教室」を開催し、評判は上々。また、この夏には東京農業大学や日本大学の学生を対象に「クラフト教室」を開くなど活躍の場は広がっている。青柳さんの夢は「小菅村の自然の恵みを活かして木を使い木を生かすことが広まるよう流域の方々に『クラフト体験』を楽しんでもらうこと。多くの方が小菅を訪れ小菅村に元気と活気が生まれること」だという。今後の活躍が楽しみだ。

学生を指導する青柳博樹さん

多摩川源流協議会がシカの食害調査実施

甲州市、丹波山村、小菅村、奥多摩町で構成する多摩川源流協議会は、深刻化するシカの食害から植物の個体保存を図ろうと平成19年に秩父多摩甲斐国立公園の特別保護地区（大菩薩峠親知らずの頭）にシカ柵を設置したが、7月1日のシカの食害調査でマツムシソウやシモツケ、ヤマオダマキ、オオバギボウシなど沢山の種が回復し元気な姿を見せるなど、この4年間で劇的な変化が生まれていることが確認された。

当日の調査活動には、環境省奥多摩自然保護官の一瀬克久さん、レンジャーの勝部さん、小菅村の山野草研究家の小島力さん、源流協議会事務局のスタッフが参加した。大菩薩峠では、介山荘の益田真路さんからシカの食害の実態を聞き取りした。益田さんの話によると最近シカの頭数が増えて食害が益々ひどくなっているとのことで、介山荘周辺までマルバダケブキを除いて殆ど食べ尽くされているとのことであった。

親知らずの頭の試験地では、大菩薩の花々の代表の一つであるマツムシソウやシモツケが幾つも芽生えており、確実に山野草が試験地内で回復している事が確認された。小島さんは「マツムシソウやシモツケが、単独ではなく7から8株集団で芽生えている。背丈や茎の大きさも平均的な太さまで成長している。ここまで劇的に変化するとは思わなかったが、自然の回復力の原点を見た思いだ」と語っていた。

当日確認した植物は次のとおり。

■ニガナ、オトギリソウ、レンゲツツジ、シロバナヘビイチゴ、シモツケ、ヤマハハコ、イタドリ、バライチゴ、マツムシソウ、リンドウ、ワレモコウ、アカショウマ、アキノキリンソウ、ウスユキソウ、ノアザミ、ミヤマニンジン、ツリガネニンジン、オオバギボウシ、ハコネギク、ベニドウダン、ウマノアシガタ、ニョホウチドリ、ハナイカリ、ノコギリソウ、シロニガナ、ミズトンボ、シシウド、ウメバチソウ、ヨモギ、マイズルソウ、ヤマオダマキの31種